

『INCHの楽しい仲間たち』 vol.9 その4

世界の森林減少とその課題を解く(4) 最終回

～フィールドワークから考えるインドヒマラヤの魅力～

長濱和代(目白大学客員研究員・非常勤講師 東京成徳大学非常勤講師)

インドヒマラヤの魅力フィールドワークから語り、それを通じて世界の森林減少と保全について読者のみなさんに関心を持って頂くことができると考え、4回に及ぶ連載となりました。今回は最終回となります。

前回で書き終えることができなかつたカレーの話題からすすめてインドヒマラヤの魅力について考え、インド研究を通じて私が目指すことについて、紹介させていただきます。

1. 現地での食べ物

インドというとカレーを思いうかべる読者が多いと思います。たしかに私は山村に滞在中に毎日カレーを食べており、そこでは実に様々なカレーに出会います。私たちが味噌汁に季節の野菜や身近な材料を取り入れていただくように、現地では季節の野菜がふんだんに取り入れられ、多様なカレーが作られています。山村では、地域の人たちのほとんどがベジタリアンで、肉の代わりに豆をいれたダルカレー(写真1)がよく食されています。各世帯で収穫される豆の種類が豊富なので(写真2)、みなさんも家庭に滞在する機会があれば、飽きることなく様々なカレーを楽しむことができるでしょう。付け合わせにはサブジーという野菜のスライス炒めが副菜として出されます。北インドの山村では、良質な豆からのたんぱく質と多くの野菜がスパイスと一緒に食されており、健康的にも理にかなっているようです。どの山村でも80才を超える高齢の長老にお会いできることから、インドの食の合理性を伺い知ることができます。

現地では家庭を訪問すると、「ようこそ我が家へ」という意味が込められた飲み水が出されます。チャイ(甘いミルクティ)や食事の前にも出されます。ただし現地で出された水はお腹を壊す可能性がありますから、まずはお断りしてください。そしてボイルドウォーター(沸騰後に冷ました水)かミネラルウォーター(マーケットで購入)を飲みましょう。現地に在住している日本人や旅慣れた海外からの研究者は、そうした水を携帯しています。私は世帯訪問のインタビュー調査の時に、最初に出されたお水を断るのは申しわけなく、10年位前に調査を始めた頃は、水を飲んでではお腹を下していましたが、最近はお水でも異変を感じることはなくなりました。しかし肝炎にかかる可能性もあると途上国の滞在歴の長い日本人の方に注意を受けました。現地の方でも(インドは広域ですから)場所を変えればお腹を下すことがあると聞いているので、飲み水については油断してはいけません。生の飲み物、食べ物についても、同様のことがいえるでしょう。



写真1 チャパティ(小麦と水で練り焼く)とダル(カレー)と青菜のサブジー(2014年)

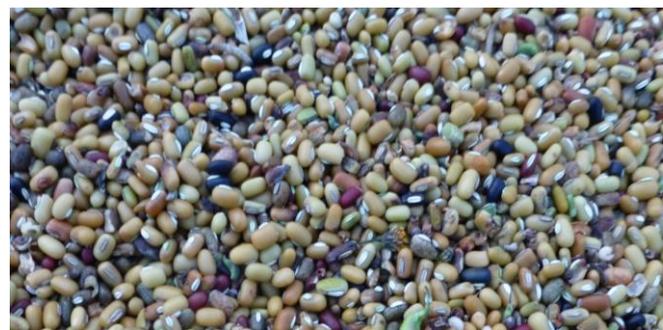


写真2 「何種類の豆を見つけられますか？」
ウッタラーカンド州テーリーガルワール県
Rawat 家の秋の収穫から(2013年)

2. 冒険に満ちた山村での滞在



写真3 落石にあったトラック

ウッタラーカンド州にて (2018年)

調査では、いつ谷に落ちるかかわからないジープに乗って中山間地域に
り、標高 2,000 メートル前後のあちこちの村落へ入り、山村へ滞在
こは南京虫と闘い、野犬にもかまれるなど（インドでは狂犬病曝露後
ワクチンを接種しないと命を落とす危険があり、狂犬病のワクチンが接
種されている日本の犬とは異なる）、アドベンチャーに満ちています。
今年9月のインド訪問では、雨季の終末に入ったため、毎日スコールの
ような雨に合い、デリーはじめ各地域で道路が冠水する様子を観察しま
した。またヒマラヤ山麓にあるウッタラーカンド州チャモリ県の標高約
1,900 メートルの山村へ向かう途中では、大雨とともに、土砂崩れの場
面にも遭遇して（写真3）、落石に当たった車を目の当たりにして、こ
こで私も命をなくすのか！と思う経験をしました。

不思議なことにそのスリルに満ちた体験は、ワクワク感を増幅させ、
またインドへ行って「生きていること」を肌で感じられる体験を再び味わいたいと思わせます。調査中はどこ
に行くと安全に移動して滞在できるのか、「野生の感」というべき直感（経験による裏付けも含む）に頼って
移動し、辺境と言われる場所に住む人々を訪れることに喜びを感じます。今までに体験したことのない自然や
地域の人々との出会いや、未知なる話を聞く時は本当に興奮して、脳からアドレナリンが出ているのが感じら
れます。日本にいる時は、平和な国家と安定した治安に感謝するのですが、「野生の感」は鈍る一方です。そ
のため私はジョギングなどをして体を鍛え、わずかな有酸素運動による微量のアドレナリンの分泌を感じつつ、
次のフィールドワークの機会を待っています。

3. インドのカオスと困難

インドでは急速に人口が増加しています。「カオス（混沌）から
なるインド」とは、まずは人の多さを考慮すると良いかと考え
ます。全インドで 29 州あるうち、ウッタラーカンド州について
の人口と増加率を調べました（表1）。ウッタラーカンドの人口
は、1991 年に 711 万人であったのが、2001 年には 849 万
人、2011 年には 1,012 万人と、急速に増加しています。平地
である Haridwar 県や Uttam Shigh Nagar 県では、10 年間で
人口増加率が 30%を超え、クマオン地方の拠点である
Nainital 県では、25%を超えています。ハイシーズンのナイニ
タル市内を訪れた時は、内外からの観光客と地元の人たちでど
の宿も満員！滞在先が見つからず、その晩は野宿をしようかと覚
悟した夜中に、ホテルの事務室に簡易ベッドを運んでいただいて、
即席の宿泊施設を作っていただいた経験があります。

次に考えるカオスは、困難や悲しい出来事から来る混沌です。
インドでは人口が多いためか、インド人の友達が増加しているせ
いか、毎年、知人が亡くなります。医学が発達しているにも関わらず、椅子から落ちて頭を打ち、数時間後に
息絶えたというヴィノッド氏の 2 才の愛娘が思い出されます。NGO のリーダーであり、現地では狂犬病のワ
クチン接種のために病院へ連れて行ってくれたプシュキン博士は、2 年前、40 代後半で脳腫瘍のために亡く
なりました。とても悲しく自分を混乱させる出来事ですが、私たちいつかは死ぬということ、実態を持って
示唆しています。時の再現性はないことを実感し、自分の生活を見直す契機となりました。

毎回、様々な困難が起きるのですが、それらを慈しみ、そして人生の糧としようとする自分がいます。

表1 インド・ウッタラーカンド州に
おける 13 県の人口と増加率
(India Census Data 2001:2011)

地方	県	全面積 (km2)	人口 (千人)	人口 増加率 (%)
Garhwal ガルワール	Tehri	3,642	620	2.4
	Uttarakashi	8,016	330	11.9
	Pauri Garhwal	5,329	790	-1.4
	Dehradun	3,088	1,700	32.3
	Rudraprayag	1,984	240	6.5
	Chamoli	8,030	390	5.7
Kumaon クマオン	Haridwar	2,360	1,890	30.6
	Almora	3,139	620	-1.3
	Bageshwar	2,246	260	4.2
	Champawat	1,766	260	15.6
	Pithoragarh	7,090	480	4.6
	Nainital	4,251	950	25.1
Udham Singh Nagar	2,542	1,650	33.5	
Total		53,483	10,180	13.1

4. 解けない環境問題の課題になぜむかうのか



写真4 チャモリ県での世帯調査 (2014)

初めて、インドへ行ったのは足立区の小学校で教員をしていた10年前の夏でした。そして世界の森林減少と課題に出会い、現在は依頼があれば出前授業をして環境問題や森林保全について伝えようという活動に至っています。

公務員を辞して研究に向かう理由は何でしょうか（よく聞かれます）。それは「解けない地球環境問題を解くためです。」と答えます。でもそれは表向きの理由で、純粋にフィールドワーク（写真4）を通じた研究が好きで、今までに述べた魅力にあふれるインドとの良好な関係が続いているからだと思います。

さらに考えると、自分が小学生の時に授業で考えた問いが今も存在するからです。「なぜ地球環境は劣化していくのか」、「なぜ森は減り続けるのか」、「貧しい国はなぜ貧しいままなのか」という問いです。世界の森林減少や地球温暖化を含む環境の課題は国際的課題であり、貧困の課題ともリンクしています。国際機関や非政府組織（NGO・NPO）など、国家や市民のレベルで努力していますが、根本的な改善は可能でしょうか。

私はそのような状況に悲観せず、自分は研究や教育を通じて世界を変えることができる可能性があると思っています。そしてこれからも研究や草の根的活動に寄与していきたいと考えます。

5. 自分のできる行動とヒマラヤで見る夢

世界の格差の実態を捉え、どんなことが私たちにできるのか。この4月から目白大学で「国際ボランティア論」を担当して、大学生を対象に国際協力やボランティアについて学び、考え、行動するお手伝いをしています。学生を観察していると、行動するという事は勇気がいることだと思います。そんな一歩を後押しすることができればと、教壇に立っています。

また私は自分の住む松戸市で、環境審議会の委員をしており、この10月から5年目（3期目）を迎えます。環境に配慮した政策を取っている国や地域は、経済的成長を遂げて先進国に追いつく可能性があると考えており、自分の拙い知識と経験が役に立てばと思い、発言をしています（議事録はインターネットで公開中）。

地球環境問題が深刻化している昨今ですが、普段の生活の中で地球環境の課題について実感する機会は稀少でしょう。それでも国内外のニュースやネットを駆使して真実を知る努力をすること、身の回りの生活を世界の問題と結びつけること、世界の状況について科学者の目で見ようとするとともに、自分なりの知見と哲学を持つこと、さらに仲間たちと問題を解き明かすために何でも語りあえる場があることが理想です。環境に配慮する行動を実行できる「成熟した市民社会」の形成を目指します。

こうした目標達成のヒントを得るために、大学から許可を得て、また家族を説得して、今度は数か月単位でインドのヒマラヤ山麓（写真5）へ出かけようと思案中です。

インドヒマラヤには、みなさんの目標を実現させようとする魅力があります。ぜひ人生に一度はインドをご訪問ください。ご要望あれば旅のサポートをしますので、編集部を通じてご連絡いただければ幸いです。

最後になりましたが、4回にわたり本誌に連載させていただいた編集長の黒澤さんはじめスタッフのみなさま、ここまで読んでくださった読者の皆様に心から感謝申し上げます。



写真5 ヒマラヤ山麓を望む
ウッタラーカンド州にて (2018年)